土佐日記試論

リアリティとテクスチャリティ。

平成十七年　七月二七日　梅田　径

（＊）原則として勉強会時のままだが、注意として、これはHP掲載用の原稿であり、別紙に参考資料を用意してある。そちらはHPでは見れないことを承知されたし。

はじめに

1．テキスト

テキストとはなんだろうか。

テキストとはなんだろうか、と問いかけるこの姿勢はなんなのだろう。

私達は、どんな権威で、どの視座で、どんな立場にいることで、この問いを発するというのだろう。私達は目の前にあるこの書物に対して、どのような権威をもってこの問いを発しうるというのだろう。

あなたが持っている本と、私が持っている本。同じタイトル、同じ著作者、同じ出版社、同じ記号の連續。わたしとあなたは、同じ本がもっていることを担保にして、その本について語るかもしれない。

あなたは、私と同じ本を持っているということを疑うだろうか。

ここで私はひとつ間違いを犯しているのかもしれない。

同じ記号を持つ本とは、同じ本そのものではない。同じ意味内容の書物をさすのだから。

しかし、そんなものはありうるだろうか。ありえると私達は自然に考えている。まったく同じ意味内容の書物を現出させているもの。それは夲というメディアだ。出版社であり、外装であり、カバーであり、装丁であり、何よりも、一言一句たがわず同じ記号を印刷する、活版印刷の書物である。

忘れてはならない。活版印刷がなかった時代――という言い方は語弊があるが――には、そんなものは夢のまた夢だった。書写というメディアの大系については説明しないが、そこには常に「不純な記号」が紛れ込み「必須の記号」が磨耗していく。

その果て、現在の日本に残っている大半の書写メディアは、磨耗した記号の羅列にすぎない場合も多い。もっと言おう。解釈が不可能なほど損壊した本文は数多く存在する。テクストを目前に投機された本文とする論理は、本文破損という現実的な暴力が許さないのである。[1]

---

[1] 当然異論もある『テクストはまちがわない』石原千秋

それでも古代の人々は、その「誤写」もまたテクストの連続性を担保しうると考えていた。仮名遣いや漢字は年中書き換えられた。それでも、それもまた記号を連続させる要素だと思われていたのだろう。

だが注意しよう。記号の連続性を担保しているものが「文字」であり「音」であるという解釈は、日本語という言語形態が可能にしているのだともいえる。中国語では、一字の違いが書写の論理を崩壊させる（もちろん、校訂などの作業によって本文の純粋さを保とうとしていたが）。

とまれ、日本語では「音」の連続性があれば、最低限の記号の連續は保たれると自然に考えられているのである。ここ、わりと重要。

テクストの論理を支えているのは、何よりも解釈可能な本文の存在である。だが、誤読というタームを導入しているとはいえ、テクスト論は破損し混乱した本文に対しても、言葉一つで自分の立場を宣言しうる。目の前に投企されている、それもまたテクストであり、解釈の対象であると。

だが、この裏には近代的メディアに依拠する印刷の存在と、印刷と複製によって記号の等質を保証されている現在を受け入れる我々読者の存在がある。私達はその意味で「現在」から抜けだすことができない。寫本の世紀に生きていない。その時の言葉を生きることができない。わかることすらできないかもしれない。

アカデミックな意味での「文学研究」とは、ただ読むことではない。論文を書くこと？そうかもしえれないし、そうじゃないかもしれない。「研究」においては、禁則が二つあるだけである。

ひとつは、パクリをしてはいけない。

ひとつは、指摘をしなければならない。

そうした研究のもっともストレートな成果を、あえて何か限定的なことばでいうならば、「誤読」を徹底して避ける仕事（注釈）であるといえるだろう。もうひとつあげるならば、もっとも妥当な意味での評価判断（文学史、観賞）であるとわたしは考える。ちなみに、この妥当性を担保しうると考えられていたのが、作品の作者への還元、作者論であり、こうした作家論の弊害を打破していく方法のひとつがテクスト論であった。これは余計な話。

これから読むのは「古典文学」である。私達はどのような態度で、どんな権威をもって、どの視座で、どの立場を選ぶのか。それをまず決めなければならない。現代であれ近代であれ、時間軸の彼方？　「忘却の穴」か？　向こう側に切り離された過去に向き合うとき、私達は古代に接近するための努力をするのか、そうした努力を忘れるのか。

そんな視座のいくつかを紹介する。勉強会に参加される人が、どのような立場にたつかはしらない。ただ、参考になるような何かを提供できたら、この勉強会は成功だ。

なぜか。

『土佐日記』を読む仕事にはそんな問いかけついて回るからだ。

2．研究の手順。

『土佐日記』を考える前に、この作品の背景や研究状況について簡単にまとめておきたい。

また、簡単に文学研究というものを概説しておこう。

土佐日記の歴史的背景の把握は、作品研究のどこらへんにあるのか。

古典文学の研究段階の、もっともベタな流れを簡単に述べると以下のようなものだろう。

① 本文研究・本文回復。

② 作者研究。

③ 作品研究（作品史研究）→解釈・観賞。

方法→言説分析、内容分析、構造（造詣）分析、脱構築、Etc。

目的→作品分析、観賞、事実考證、課題提出、読解、資料整理。

④ 文学史的評価。

『土佐日記』は従来もはややりつくされた感のある作品であり、いずれの研究段階においても最大の成果をあげている。その集大成ともいうべきものは『日記文学事典』であり、やや古いが『土佐日記全釈』であろう。

しかし、現在これらの研究にたいして重大な疑問が投げかけられている。それは主に③の段階において、従来研究が終わったとされるような諸問題に対して再び問題が浮上している事態だといえる。そこについては後述するとして、①と②の段階について簡単に説明しておこう。

『土佐日記』を「知る」。

3．土佐日記の書誌。

『土佐日記』が、他のどの古典文学とも異なる点は、この本文という最も基本的にして重要な部位に関連する。冒頭で「テクスト」という概念の近代性について述べたのも、実はここに由来するのだ。

古典文学の書誌については専門家以外基本的には必要ない。が、一応はこうなる。

①「ほとんどの作品では、オリジナルとされる本文はたいてい存在していない」

②「作品の本文は大抵寫本別に異なる。それらを訂正しようとする作業を「校合」といい、日本では「書誌文献学」がそれに当たる学術分野である」

③「書誌文献学的な発想は昭和初期に入ってから池田亀鑑などにより行われた。その成果の最たるものが『古典の批判的処置に関する研究』である」

いささか余計な話しだが、江戸時代では古典の享受がきわめて広く行われた。その膨大

な享受をささえたのは版本という出版印刷のメディアだったわけだけれども、そのメディアごとに何を底本とするかはまちまちだった。つまり、読解者が、他の読解者と同じ見解を出しうるための本文の整合性は少ししか保証されていなかったのである。（それでも、同記号の書物をある程度の量提出できるという強みはもちろんあった。均質化された知識の普及とでもいうべきか。）

版本以前のメディアである寫本の時代ではどうだろうか。寫本というメディアはそれ自体誤謬を含んでいることが前提とされるメディアであり、それを逆手にとれば、誤謬を正当と主張する「テキストの権威化」が行われるのも必然であった。

例えば、中世から近世にかけて「家の本」という理念があった。各々の家が「証本」をもち、証本があることによって自らの家と学を権威化したのである。このあたりのくだくだしい議論は暇があったらすることにしよう。

こうしたことを踏まえてうえで、さらにそれ以前ではどうか。

『土佐日記』の原本書誌はまったくといってわからない。わかるのは、現在『土佐日記』の粗笨は存在しないということだ。

しかし、『土佐日記』の「本文回復」は、他の文学作品ではありえないほどの成功を収めている。今回とりあげる範疇でことに重要な書誌学意義は、「ほぼ平安時代の仮名遣いがわかる」という点に存ずる。このあたりの事情については、前述の『古典文学における批判的処置』を読んでいただければわかるだろう。（読むだけの氣力があればだが）

なかでも重要な要素は以下の数点である。『古典の批判的処置に関する研究』による。

①．室町初期まで貫之自筆本とされる粗夲が殘存。

②．現在残っているもののなかで、特に粗夲を書写したものは定家自筆本および為家自筆本であるが、このニ書はまったく異なる本文をもつ。

③．為家自筆本は現在閲覧禁止であるが、その忠実なる系列本である青谿書屋本がある。

④．青谿書屋本は、ほぼ正確な貫之本のコピーである。定家本は誤写が多い。

4．土佐日記を書いた人。

中身に入る前に、ついで、作家研究である。

『土佐日記』を書いた人という言葉には、二重の意味がある。とりあえずは「著者」であるとされている紀貫之という人物である。彼が『土佐日記』の作者である根拠は二つ。ひとつは前記の定家本、家屋本の奥書である。もうひとつは貫之の人生において重要なことは三点。

①．古今和歌集の選者であること。

②．晩年に土佐の守になったこと。政治的には大成しなかったこと。

③．現在残る作品は『古今和歌集』『土佐日記』『貫之集』およびその他の文献に引用さ

れる和歌であること。

④．晩年になり『土佐日記』を書きあらわしたらしいこと。

あたりを踏まえておいてくれればよい。また彼が好み多く作った「和歌」の特徴を踏まえるなら、二つ。

①貫之語とでもいうべき、独自な語彙の使用。

②作中主体へのさまざまな対応。（女性、子供、鹿、聞く人などなど）。

また、貫之の仕事として多く「屏風歌」というものがあげられる。②については屏風歌というものの性質が重要なのだが、屏風歌については必要があれば説明するとしよう。

5．土佐日記の内容

『土佐日記』の構成や主題について、従来言われていたことを整理してみよう。

内容としては、「先の土佐の守」が、歸京するまでの五十五日間を、任務交替の引継ぎのことや土地の人との惜別を記し、船旅にはいる。場所は多く海。隨所に和歌を織り込みつつ、悪天候、海賊、海路などに怯え、旅の無聊をかこつかのような舶人との対話、歌論的批評、忘兒追慕などを記し、京の自宅についたところで筆を置く。

五十五日間全てに記録がある日次記である。また和文で書かれていることを抑えておこう。

主題としては、『日記文学事典』によると主題を一点に絞るのは難しいが、萩谷朴『土佐日記全釋』が歌論展開、社会風刺、自己反照のみっつがテーマに挙げられているとはいえ、単純にいって「主題」が「複数ある」というのは、主題論という問題設定に対する矛盾である（主題は「主」なテーマがある場合に有効）という指摘もある。

著述の形態としては、ひとつ、女性仮託というフィクショナルな要素があげられる。しかし、その「女性」が船旅においてどのポジションにいるのかは不鮮明であり、また男性語の多用から女性仮託という趣向は破綻している。また三人称の記述も多い。そのうえ、人称の「ブレ」や感情吐露主体がぶれていることなどは問題になっている。

後代の女流日記文学への繋辞であるとされるが、いわゆる平安中後期の女流日記文学の著者たちが、土佐日記の方法論や技術論を受け継いだ形跡は薄く、さらにいえば読んだ形跡もないようである。ただし、旅日記として後代の「紀行記」に繋辞しうる可能性はある。

とまぁ、以上が簡単に抑えておいてほしーかなー。

6．土佐日記研究の外観

土佐日記という書物は、今、そのすべてが問題となっている。誰がなんのために、どのような目的で、どのような技術を使って、誰に対して、書いたのか。まったくわからないわけである。

細かい問題はテキストをみながら話していくかもしれないし、もっと単純にいろいろな

ところで開示していくかもしれない。

とまれ、研究史的なレンジで『土佐日記』において問題となっているのは、二つの視点の「ぶれ」によるものである。

土佐日記の研究方法としては二つの立脚点が存在していること自体が問題と言えよう。一つは紀貫之が書いた日記として土佐日記を捉える視点である。（中略）実在の紀貫之の歌風や実生活を中心に土佐日記の表現を分析する立場である。そしてもう一つは、あくまでも日記文学の歴史の中に土佐日記をおいて研究する方法、ひとつの虚構の作品として表現分析を中心に研究していく方法である。[2]（川村裕子）

ということ。簡単に言えば、①作家還元、作品論と②文学史繋辞、テクスト論の立場の違いというところだろうか。

ちなみに、どちらも限界にきてます。

作家還元論的な立場のほうでは、「貫之」という人物を実在の存在として捉えられるほど強固な資料がないことと、作家研究が不十分なまま作品研究が進むごとに、貫之が「通常ではありえない超人」になっていってしまうということがあげられる。近代文学では夏目漱石がそうかな。

さらに、この作品に「貫之」を導入する意味をどこにおくのかも定まらない。作家の「実体験」や「繰り返される主題」などを、貫之の数少ない著作の中から見出すのは容易ではなく、一方で「貫之」という人物に寄せて考えること自体が、『土佐日記』の評価を曇らせているとも考えられる。後述。

そして、「貫之」という男性官人がなぜ女性仮託をしなければならなかったのか（しかも失敗している）というようなテーマにきわめて恣意的な返答しかできないというのも問題になっている。また、こうした「貫之」をおいかけていくと『土佐日記』には存在しないコードで『土佐日記』を読んでいかなくてはならなくなるという問題もある。（民俗学の導入など（ちなみに、「物研」の議論はどちらかというとこちらによりがちである））

また、文学史論的な立場では、それ以前のコンテクストにも、以後のコンテクストにも、『土佐日記』がつながっていかないという現実があることで、文学史的な意義付けが極めて難しい。

きわめて「難しい」作品で、どういうふうに切り込む議論が有効なのか、よく考える必要がある。

そこで、きわめて有力そうな議論がある。

それが「物語研究会」のラスボス神田龍身の土佐日記論「シニフィアンとしての海面／

---

[2] 『平安文学研究ハンドブック』田中登・山本登朗編、和泉書院、２００４．５。

假名文――仮名表記文学論」[3]だ。「物研」自体についてあれこれ言っていってもよいのですが、実際にどういう議論を展開していくのかをみてもらえればいいだろう。

この半ば「評論色」の強い研究が、強いインパクトをもって学会に認められたのはこれが「テクスト論」をもって土佐日記という作品に切り込んだからである。厳密な意味でのテクスト論的文芸批評ではないのだけれど。

それがどのように有効であったか、簡単に議論を紹介しておこう。

『土佐日記』を「読む」

●先行研究の検討。――「シニフィアンとしての海面／假名文」

この論文が視野に入れているのは、前記青谿書屋本の表記の問題である。

『土佐日記』が平安時代の書記形態がわかるほぼ唯一の本であることは述べた。

ではそれがどのようなものかというと特徴は五つ。①原則として仮名表記②漢字は、日付③一音一字＝仮名と同義③漢字音の場合のみ漢字④拗音便⑤例外として一月二九日の「人」。

つまり、過剰なまでに仮名、一音一字にこだわっているのである。

こうした表記が『土佐日記』において海面に投影される、さまざまな現象と回想の隠喩としての假名＝音聲を現出させる、というのである。

作品内部に、天気の記事が多いことに注目する。

続いて、波と風という共振関係についてこう述べる。風波の関係がシニフィエ／シニフィアンという言葉の関係とパラレルであると続ける。

> 海面に刻まれた波紋とは、目には見えない風の形にほかならない。風というシニフィエは波というシニフィアンに換喩的に変換可能であり、あるいは波なるシニフィアンは因果論的にシニフィエとしての風の所在を証しているということになろうか。[4]

本文を参照してみよう。「かぜなみ」という表現は土佐日記にかなり多い。

> 十五日、今日小豆粥煮ず。口をしくなほ日のあしければゐざるほどにぞ今日廿日あまり經ぬる。徒に日をふれば人々海をながめつゝぞある。めの童のいへる、
> 立てばたつゐれば又ゐる吹く風と浪とは思ふどちにやあるらむ
> いふかひなきものゝいへるにはいと似つかはし。[5]

---

3 『偽装の言説――平安朝のエクリチュール』神田龍身、森話社、１９９９・７.

4 神田前掲書。

5 岩波旧日本古典文学大系による。

こうした共振する表裏の関係とそれに伴う連想が『土佐日記』全体を貫通する、貫之のポエジイである。[6]このような連想を現出させる空間として、「海面」に注目する。

例えば、二月五日条。荒れた海に静まるよう祈るが無駄であり、楫取りが幣を奉るように言い、たてまつっても嵐はおさまらず、ひとつしかない貴重な鏡を奉ったところ、海はたちまちに「かがみのおもて」のごとくに静まったのである。

海が、鏡面のごとくに凪ぎてしまったという変容過程まるごとが、一つのシニフィアンとして機能しているのである。そして今度はそれを「ちはやぶるかみのこころをあるるみにかがみをいれてかつみつるかな」として「かみのこころ」なるものの力の作用として解釈しているのであった。

私はここにどうしても、記号の生成する瞬間を、そしてシニフィアンとシニフィエとの境界域を波の譬喩をもって図示したフェルディナン・ド・ソシュールの美しいメタファーを想起せざるをえないのである。（中略）海面は実にさまざまな変容をかなで、明らかに一つの運動相をなしているにもかかわらず、それ自体としては質量ともども零でしかないのである。そしてこのような世界認識の方法とは、とりもなおさず世界が言語の構造そのものとして分節化されていることの発見の問題でもあったのではないか。[7]

風と波というパラレルな関係の相関が、言葉が織成す世界変容＝記号生成ともパラレルに、（作品上での）「言語ドラマ」を引き起こしているという議論がまず展開される。その場となるのが「海」であることも注意を要する。さらに「かみのこころ」という問題、シニフィアン／シニフィエの問題にさらに切り込んでいく。一月二十日条。

二十日、昨日のやうなれば船いださず、皆人々憂へ歎く。苦しく心もとなければ、唯日の經ぬる數を、今日いくか、二十日、三十日と數ふれば、およびもそこなはれぬべし。いとわびし。夜はいも寝ず。二十日の夜の月出でにけり。**山のはもなくて海の中よりぞ出でくる。かうやうなるを見てや、むかし安倍の仲麻呂といひける人は、**もろこしに渡りて歸りきける時に、船に乘るべき所にて、かの國人馬の餞し、わかれ惜みて、かしこのからうた作りなどしける。あかずやありけむ、二十日の夜の月出づるまでぞありける。その月は海よりぞ出でける。これを見てぞ仲麻呂のぬし「我が國にはかゝる歌をなむ神代より神もよんたび、今は上中下の人もかうやうに別れ惜み、よろこびもあり、かなしみもある時には詠む」とてよめりける歌、

「あをうなばらふりさけ見れば春日なる三笠の山にいでし月かも」

とぞよめりける。かの國の人聞き知るまじくおもほえたれども、ことの心を男文字に

---

6 古今和歌集、春上・８６参照。

7 神田前掲書。

さまを書き出して、こゝの詞傳へたる人にいひ知らせければ、心をや聞き得たりけむ、いと思ひの外になむめでける。さて今そのかみを思ひやりて、或人のよめる歌、

「都にてやまのはに見し月なれどなみより出でゝなみにこそ入れ」（傍線、傍点、論者）

この日本最古の翻訳論においても、「心」と「ことば」にソシュールの翻訳論的な意味合いでのシニフィアン／シニフィエの関係が見えるということ。

また、この仲麻呂挿話を想起していく契機として、（幻影を映し出していく装置としての）海の中から現れてくる月が、シニフィアン／シニフィエとしての言葉と心の発露を強いているというのである。

この事態を端的いうならば、「心を男文字（漢字）」にかきいだして、「ここの詞伝へたる人」に伝えたところ「心」を聞き得たのか、思いのほかに感動したということである。ここでは「異言語間の翻訳」が焦点化されている。

さらに「もろこしとこの國とは事ことなるものなれど、月の影は同じことなるべければ人の心も同じことにやあらむ」という一節はさらに重要である。もろこし（中国）とこの国（日本）とは、「事」が違うが、「人の心」は同じであるというのである。「事」「心」の関係が見えてきたのではないだろうか。これを言語の枠組みに入れて見ると、「事=シニフィエ」と「心=シニフィアン」[8]という関係が見えてくるだろう。

ソシュールの翻訳論の「甘さ」はさまざまな地点で批判されているが、ほぼこれに類似する言語の形相を思索していた貫之（と一応いっておく）の眼目は舌を巻くものがあるだろう。

この議論では、こうした言語の動的な性質、描かれる海・風の性質などが、表記の問題ともそれぞれの地点で結びついているとする。

その地点とは、「かな表記」である。「和文」というもののプライオリティを「男文字」=中国との対比のなかで設定しているのである。

それを観察することができる唯一のテクストが、この『土佐日記』なのだ。

では、青谿書屋本と定家本の書様を見比べてほしい。特に注意すべきは和歌のあり方である。こうした書き方の差異を通して見えてくるものは、定家本のほうが読みやすいことと青谿書屋本はなんらかの理由があってこのような読みにくい本文になっているのではないかということが疑えることである。

神田氏は、このテキストのありようを「和文=假名=音聲」という原理から考察する。意味が音を兼ねる漢字を「重たい記号」とし、その一方で記号に音聲しか含まない仮名文

[8] シニフィアンとシニフィエについては実にさまざまな議論がある。しかしここではもっとも原初的な意味、フェルデナンド・ソシュールの語彙でつかわれていると理解されたい。わかりにくいという人は、シニフィアン=意味。シニフィエ=言葉・記号といい変えてもらってもよいだろう。余計にわからなくなるかもしれない？

字を「軽い記号、透明な記号」と呼ぶ。そして、和文の表記が「音聲」を意識したものとして存在すると假定するのだ。極端に言えば、音聲そのものの記述を狙った表記として『土佐日記』の表記法があると述べる。その根拠となるのが、和歌の記述である。

論の白眉はこの一歩先である。

しかし、定家本の表記もまた、読み上げれば音声的テキストとなり、青谿書屋本の表記はいくら音声的を模したところで、それは書記の言語にすぎないということである。

つまり、貫之は音聲を視覚化するということに挑み、失敗したということになる。

『土佐日記』が目指した透明性は、その表記の向こう側に内容として「暗い海」を現象させる。漢文日記のフェティッシュな性格、漢文という「現實の指示対象と同じものを紙面の上にもう一つ作ってしまう」言語に対して、『土佐日記』は次のような世界であると述べる。

一方それに対してここは海の上というなにもないガランとした空間である。なにもないからこそ様々な立場から言葉が言葉として発せられ、世界を束の間分節化し、イリュージョンが自在にくりひろげられることになる。様々な幻想が、海上空間にあらわれては消え、あらわれては消えていくのである。まさにそれは言語の特性を生かすに格好な言語空間だったのである。しかもそれをするのも音聲表記の仮名文字という、限りなく軽快にして透明な、あるかなきかの質量零のシニフィアンなのであった。そしておそらく『土佐日記』が自らを「をむな」のエクリチュールとしていることの意味とは、一切の社会性、具体性、現実性……等の欠如したシニフィアンを仮に「女」としているというように借定しているということではないのか……。[9]

こうして、仮名文字＝女、漢字＝男という関係性すら、シニフィアン／シニフィエの相関性のなかに繰り入れられる。この中に見えてくるものは、「一切の性質が欠如したシニフィアン」が執筆主体として働いていること、それが、貫之が、エクリチュール＝言語世界＝記号生成＝表記の連鎖の中で、「欠如」への注視を示す契機であるという議論へ導いている。それは、漢文というエクリチュールにとらわれた官人男性からの解放であると同時に、しかし、こうした言語空間には結局、現出させたものすべてが「不在」であり現実には存在しない「虚無」でしかないという空しさだけが、貫之の中には残ったのではないか、として論は終わる。

『土佐日記』を考える。

---

[9] 神田前掲書。

先に紹介した議論のいたるところに「物研」らしさが見えて取れる。ソシュールの名もそうだが（お気づきの人もいるかもしれないが、この議論の音聲と書記の関係はジャック・デリダに寄っている）、多用される「と思われる」「のではないか」という推測・推断の多い文体と、論拠の構築と支援により妥当な議論を積み上げて行く研究態度というよりは、むしろ文芸批評に近い性質をもっている。こうした議論が有効に働くのは、彼らの叢書「想像する平安文學」の名のとおり、「想像」によるしかない平安時代の書記作品に対するアプローチのあり方なのである。

反発反論も強い。文学研究の最右翼とすら言われる「物研」の議論は、理論の適応による「推論」を自らの論拠に据えることが多いため、推論部分と依拠する理論が突き崩された場合には論文の存在意義すら失ってしまいかねない。

もちろん、実証性に乏しい議論自体が嫌われる傾向も当然ある。

そうした「内輪」の事情はともあれ、物研の論文が目指す方向性としては、作品分析よりも鑑賞に、典故の博覧と解釈の安定よりもテキストの射程を広げる方向で動きがちな傾向があることは容易に想像がつくだろう。

こうした方向性は「人文科学」の実証的考証的な研究態度からは逸脱して、いささか「批評」のほうに寄りがちになる。仮説と理論による批評の積み重ねは、ほとんど「創作」と変わらなくなってしまうかもしれない。

しかし、その一方で「物研」が戦後４０年の、閉塞していた古典研究にひとつの活路を開いたことも確かである。理論のみに頼らず、実証的研究や考証的研究との兼ね合った形での研究スタイルをとる学者もいる。[10]

では、この論を切り崩すことが可能なのかどうか検討してみよう。白眉といえるシニフィアン／シニフィエの議論や、理論的な大枠については難しいだろう。可能性としては、漢文＝男、仮名文＝女という軸については多少議論のしようもある。

書記の問題を、文化的なジェンダーにまで擴大しうるのかという点。土佐日記の執筆主体は、女と宣言しながら女であることを貫徹していないではないか。などという議論があげられるだろう。書記とジェンダーの問題に関してはいささか複雑な側面に入り込みすぎるし、まさに専門分野の議論となってしまうだろう。この勉強会ではとりあげないことにして、執筆主体の問題を展開してみよう。

手段は「言説分析」[11]。（どうかかれているか）目的は「作品分析」（この作品はいったいなんなのか）である。

---

10 例えば、三田村雅子『源氏物語感覚の論理』有精堂・１９９６など。

11 いちおう記しておくと、古典文学における言説分析は、三谷邦明氏が「源氏物語論」のなかで提起したものが最初とされる。近代文学ではオースティンやサールの理論を使用されるが多いが、彼はバフチン経由で言説分析という手法を導入し「草子地」の研究などで成果をあげた。

執筆主体の「ブレ」については、以下のところを参照すれば事足りる。

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり。

という宣言はまず抑えておこう。つまり、実際に書いている人は「貫之」なのだが、書いている視点を定位している存在は「女」なのである。しかし。

廿七日、大津より浦戸をさして漕ぎ出づ。かくあるうちに京にて生れたりし女子、こゝにて俄にうせにしかば、この頃の出立いそぎを見れど何事もえいはず。京へ歸るに女子のなきのみぞ悲しび戀ふる。ある人々もえ堪へず。

二月九日条。

（前略）これを見て昔の子の母かなしきに堪へずして、

「なかりしもありつゝ歸る人の子をありしもなくてくるが悲しさ」

といひてぞ泣きける。父もこれを聞きていかゞあらむ。かうやうの事ども歌もこのむこととてあるにもあらざるべし。

と、明らかに人称がブレている。つまり、「男性語（漢文訓読語）」の問題以前に、これが「女」としての人物造詣が統一されていないのである。

二十七日では、「悲しび戀ふる主体」（前の守）と「失せた女子を見ている主体」（『土佐日記』の執筆主体）が半同一化して視点が定まっていない。

二十七日では、「悲しんでいる母」から、「父はどう思うだろうか」と変わり、「こんなことも歌をこのんで詠むのはあることはないわけじゃない」（このあたり難解。かうやうが何を受けるか不定）と感想、三人称からの視点になってしまう。

普通、こうした文章というのは「失敗作」である。うまく感情移入できないだろうし、人称がぶれている小説をつまらないといったのは三島由紀夫だって同じだ。[12]

こうした人称のブレと、後代の享受の状況を考えると、この作品は「失敗作」であった可能性がでてくる。こうした人称のブレの問題に切り込むと、屏風歌の書き方を説明しないとなぁ。なぜ失敗作かは、時間があるかな～？　あったら説明しようかな～？

『土佐日記』を踏み越える？

さて、作品を必死で論じることの意味とはなんだろうか。結局ある地点においてその作品が論じる価値があるからということになる。その地点とは「古典」であることでは

12 三島由紀夫『文章読本』

ないだろうか。

「古典」が存亡の地平線のこちら側にあるということ。すなわち「読める」ということが、それだけで「読める」こととは別の意味で価値あるものとしての古典を表象している。つまり古典＝すごい、えらいという発想だ。『土佐日記』の価値は、まさにこの古典であることに最大級担保されている。あるいは、いた。

その最たるものが、「貫之」の『土佐日記』という認識だろう。貫之が『土佐日記』を書いた状況証拠は多くあるが、「貫之」の何をどう導入することが『土佐日記』を理解するのに効果的であるか議論がないまま、貫之の書いた『土佐日記』はすごい！　という認識がずっと続いてきてしまったのであろう。

こうした古典であることに最大級の価値を置くこと。これを「古典の聖典化」という。その一方で、「聖典」はその外部に「外典」の存在を要求する。つまり同じ「読める」古代の作品に「ランク」がつけられてしまうのである。それも「文学的な重要度」という変動する価値判断によって。

『土佐日記』。

ここには古典の聖典化という問題が大きくでてきている。本当に土佐日記がカノンたりうる強度をもっている作品なのか。それはみなさまにとっくり考えていただければよいだろうし、結論を出す必要がある問題でもないだろう。が・・・・・。

一応私見を。

『土佐日記』を貫之が書いたことは疑わなくともいいだろう。多少「ミス」があったところで、現代に残る資料だけでは、この作品が一方、内容的にも何を画こうとしていたのか捉えきれない側面があることは確かである。つまり、何かを目指して書いていたのか。という部分の探求では、作家論的なアプローチも有効であろうし、その探求を行うのもまた「研究」のひとつになるだろう。

土佐日記から、土佐日記以外のテキストが読める可能性も指摘しておこう。

また、作品分析の方法論が導き出した結論とは別個に、主題の各論的なテーマにおいてはさらに有効な方法論もあるだろうし、そちらのほうで私は論を展開したいと思っています。

というかきっと説明している屏風歌の議論だが、それはまぁ勉強会に参加してくれたみなさまへのサービスとしておきます。

あと、他の私見についてもここで説明。ごめん、レジュメに書きたかったけど。

【参考】たぶん貫之が書いたとされる古今集の序文。ここにはいろんな要素がぎっしり入ってるんですが、説明できるかな。

やまとうたは、ひとの**こゝろ**をたねとして、よろづのことの葉とぞなれりける。世中にある人、ことわざしげきものなれば、心におもふことを、**見るもの、きくものにつけて、いひいだせるなり**。花になくうぐひす、みづにすむかはづのこゑを**きけば**、いきとしいけるもの、**いづれかうたをよまざりける**。ちからをもいれずして、**あめつちをうごかし、めに見えぬ鬼神をも、あはれとおもはせ、おとこ女のなかをもやはらげ、たけきものゝふのこゝろをも、なぐさむるは哥なり**。

（旧体系『古今和歌集』）

これと、心、言葉という関係を考えて見ましょう。

心の用例。

日本語では抽象的な語彙が未発達。

【参考文献】

『叢書想像する平安文学４　交渉する言葉』勉誠出版　河添房江他編　平1.

『紀貫之』大岡　信

その他。時間があれば紹介します。

ちなみにテキストは『岩波古典文学大系　土佐日記』によります。